

あらわれるげきじよう

樋口ミユ

登場人物

ゆみ／わたし／女

くみこ／ハハ

たろう／モク

そこにはなんにもない。
ただの空間。
音楽もなにもない。

と、そこに。

ひとり、俳優がやってくる。
必要なものを持って。

そこで、

何かを待つ。

と、そこに。

別の俳優がやってきて、

さらにまた別の俳優がやってきて、

揃った、とさんには思う。

マスクは、外さないまま。

以下の赤い部分は確定ではなく、フリートーク。

そして、大阪弁で書いてあるのは、ひぐちのネイティブが大阪だからというだけで、皆さん、それぞれ自分のネイティブで、という意味であります。

ゆみ えー、

前説がわりに。

ゆみ 本日はご来場いただきまことにありがとうございます。開演に先立ちまして、いくつかお願いがございます。ひとつめ、携帯電話や音の出る、たろう あ、それ、
ゆみ え、

たろう 大丈夫ちゃうかな。

ゆみ、ぎよつとしてたろうを見る。

ゆみ え、

くみこ 分かる分かる。それ言うたびにお客さん信用してない気分になるねん。

ゆみ、またぎよつとしてくみこを見る。

ゆみ え、でも、他のお客様のご迷惑に、

くみこ それも信じたい。

ゆみ あ、え、じゃあ許可のない写真撮影とか、

たろう それさえも信じよう。

ゆみ はっ!? え、あ、そしたら、飲食、

たろう 大丈夫、みんな大人やから。分かってくれてる、ねえ。

と、客席に問いかける。

きつと、うなずいたり、なにか反応をしてくれるはず。

たろう な？

ゆみ そしたらどうぞお楽しみくださいしか言うことないやん。わざわざ前説

せんでよかったやん。

たろう わざわざするんがええやろ。

ゆみ なんでよ言うことそんなないのに、

たろう あるある。

くみこ どうぞお楽しみください。

ゆみ ほらだからもうそれしかないやんか。

くみことたろうのぺこりにつられて、

ゆみもぺこりとしたら、

きつとなにか反応があるだろう。

たろう ええなあ。

ゆみ なんかははじめからつまづいたわ。

たろう やっぱり生身はええなあ。

くみこ それなあ。

ゆみ 映像配信デイスってるわけちやいますからね。

たろう あれはあれであれや。

くみこ あれしか言うてへん。

たろう ニュージャンル。俺もやったことあるし、それしかでけへん時もあるし、もう今は配信セットやし、うん、ええよ、でも俺古い人間やから、やっぱり生身がええなあ、おもて。

ゆみ ほんまこんななるなんか10年前は考えもせんかつ……

ゆみ、言いかけて。

くみこ、たろう、ゆみをじつと見る。

くみこ 10年前は、

たろう うん。

くみこ 10歳若かった。

たろう うん。

くみこ 10年前は、

くみこ ぜんぶなにもかもが生身やった。

くみこ 時間はすすむな。

ゆみ うん……

たろう 時間てなんやろな。

ゆみ うん……

くみこ 10年後は、

たろう 10歳、歳いつてる。

くみこ 20年後は？

たろう だいぶ老いてる。

くみこ 30年後、40年後、50、

たろう たぶん俺、おらん。
くみこ うん、あたしも。

ゆみ ……100年後、

くみことたろう、ゆみを見た。

ゆみ 100年後は、

ゆみ どんなんがいい？

ゆみ、いつのまにか。

丸い筒を作るように両手をくるりとして、

指双眼鏡を作る。

ゆつくりと両目に当てて、

のぞく。

くみこ どんなん……

たろう 想像がおいつかん。

くみこ 孫の子供くらいがおるんかなあ。

たろう 日本ある？

くみこ それはあるやろ。

たろう そうかな。

くみこ 言うほど変わってへんかも。

たろう いや変わるやろ。100年後やろ？

くみこ いっぱい変わったとしても、同じことで悩んでるかもよ。

たろう 同じこと？

くみこ どうやって生きていこう。

その言葉を、繰り返してみた。

たろう どうやって生きていこう。

そして繰り返す。

ゆみ どうやって、

100年後がその指双眼鏡で見えるか。

くみこは鼻歌を歌う。

たろうは明かりをつける。

マスクを外して、

お芝居を始める準備をするのだ。

鼻歌は響く。

どこのはなし？

どこかのはなし。

あっち？

そっち？

どっち？

こっち？

こここの星？

どこかの星。

どこでも同じ。

どこも一緒。

いつのはなし？

いつかのはなし。

きのうのはなし。

あしたのはなし。

終わったはなし。

はじまるはなし。

誰のはなし？

誰かのはなし。

あたしのはなし。

おれのはなし。

自分のはなし。

あなたのはなし。

はのたなあしなはのかれだしなはのれだしなはのついしなはのこど

しな

theater 3

黙々と。

膝の上に置いた分厚い紙の束に、
ガリガリと、ガリガリと書いている。

モク。

ふと、顔を上げた視線の先に、
小さな椅子がひとつ。

子どもが座るための小さな椅子。

モクはじっと見ている。

そしてまたガリガリと、

紙の束に何かを書き続ける。

モク そつと。

モク じつと、

モク し、つと、

モク 黙って。

モク 僕があの時唇閉じたのは、

モク 言いたいことがなかったわけでも、

モク 我慢したわけでも、

モク ましてや言葉を失ったわけでも、

モク ない。

モク 僕が、

モク あの日からじっとしっと黙ったのはね、

モク いちばんさいしょ、

モク 僕らのいちばんさいしょを聞くために、

モク 唇閉じたんだよ、母さん。

少し落ち着いて、

誰かを見る。

その誰かとは、「わたし」

モクのそばには、「わたし」がいたようだ。

モク これを届けてくれる？

「わたし」はゆっくりうなづいて。

theater 4

カリカリ。

女の指先が神経質に動いた。

小さな椅子の前に、その女が跪いた。

椅子に座る息子を女は見つめる。

眼差しから、それは息子の母親だと分かる。
分かるのだ。

ハハ あの日から。

ハハ 言葉をなくしてしまったみたいで、

ハハ 仕方のないことね。

ハハ 大人の私でさえ、

ハハ こんなですものねえ。

ハハは、力なく笑って「わたし」を見た。

ハハ あなたは？

わたし はい。

ハハ あなたはあの日、どこにいらっしやいましたか？

わたし、あの日を思い出そうとするが、

わたし あの日、って、その、あの日ですか？

ハハ ええ。

わたし わたしは、その……あの日は、

ハハ あんな風景見たことなかった。

わたし ……ええ。

ハハ ただ呆然と、見ることしかできなくて、

わたし ええ……

ハハ 自分が今ここにいられるのは運が良かっただけだと、そんな言い方が正しいのか不謹慎なのかも、言葉ひとつを悩みます。

わたし ええ……分かります……

ハハ この子を抱きしめながら、ずっと見ていました。

ハハはその光景を今でも思い出すことが出来る。

ハハ ……緑の、青い青い地球が真っ黒に変わっていくそれ、船の窓から見ていました。わたしとこの子が乗った船、小さい小さい窓に張り付いて、見ていました。

「わたし」椅子に座っている息子を見た。

ハハ あんなことが起こるなんて、ねえ、時々神様って意地悪なんじゃないかと疑いませんか、予習と復習をきちんとやっていたって、習ったことがない新しい問題を出す意地の悪い学校の先生みたいに、何か出来たはずだって、あれがダメだった、これが悪かったって、誰も彼もいろんな情報に惑って迷って喚いて、けれどそんなことを言い始めたらそもそも人間がいること自体が不自然極まりなくて？ そんなの、なんにも、どうにも、手の出しようもなく、振り返って故郷の星を、あ、っという間に、真っ黒、食われていくみたいに、まだそこに、いたかもしれないたくさんの人も、あっという間……必死で、空に浮かび上がる船の中、しがみついて乗ったあの、

ハハの言葉は震えてうわずって、

「わたし」、ハハの背中をそっと撫でた。

ハハ、少し落ち着きを取り戻して。

ハハ 多くの人が新しい星へ移動した、故郷に別れを告げた日。

きつと、息子はハハをじっと見ているのだ。

その視線を感じて。

ハハ あれからなあんにも言わなくなつて……！

膝に置いた息子の手、ハハはぎゅっと握りしめた。

ハハ こんな小さい体に全部閉じ込めてるの、じつとしつと黙つて、

ハハ ね、モク？

ハハ 言っているのよ？

ハハ 言つて？

ハハ 私にしがみつく指が震えてた……ねえ言っているから、どんなことでもなにを言つても、叫んで泣いて怒っている、苦しいって言っているの、誰かのせいにしていい、なんでもいいから言っているの言っているの言っている、

ハハの声が、

ハハ 言つて、モク、

大きく響く。

ハハ 言つてよ、モク、

ハハの息が、

ハハ 言つてちょうだい！

息が荒くなる、

それにツラレて、言葉も荒くなる。

ツラレてハハは自分の指をカリカリと搔く。

不安げに、神経質にカリカリと。

息子の視線を感じるのか、

ハハ お願いだから黙らないで……

ハハ そんな目で見ないで……

そんな目で、見てはいないのだけれど。

ハハ 言いたいことがあるならちゃんと言つてねえだけでもうどうしたらいいのどうしたらよかったのパパを待っていたらあの時船には乗れなかったのよ……！

「わたし」、背後から、

両手でハハの両耳をヘッドフォンのように覆う。

ハハは息を吸つて黙る。

カリカリと神経質に搔いていた指は止まる。

かわりに、

モクが書き付ける文字の音、

ガリガリ。

その音が、ハハに聞こえるわけもないが、

ハハはガリガリの音を聞いているようにも見える。

「わたし」そつと両手をハハから外す。

と、穏やかに我にかえる。

ハハ モク……ごめん、ごめんね、ママ、大声出したりしてごめんなさい、あんなこと言いたいわけじゃないのに、ごめんね、許してね……

ハハ、息子が座る椅子を前に、また跪く。

ハハ お腹すいたね？ そうね、もうご飯の時間ね、すぐ作るから、

振り返る。

「わたし」はずっとそこにいたのに、

ハハ つ……!？

まるで初めて出会ったみたいに驚くハハ。

ハハ ……びっくりした……!

ハハ、息を整えて。

ハハ あの………驚いて、その……いつからそこに？

わたし ここに。ずっと。

ハハ ずっと………？ごめんなさい、私ちつとも気づかなくて、

わたし いえ、いいんです。そういうものです。

ハハ あなた、どちらさま？

「わたし」はハハを見た。

わたし メッセージャーです。

ハハ メッ……

わたし はい、メッセージャー。

ハハ ……なにかを、うちに届けにいらしたの？

わたし はい。

ハハ ああ、

ハハは、「わたし」が何を届けるのかとじっと見るが。

ハハ ……なにを？

わたし それが……幾度届けても届けても、すぐにかき消されてしまうから。

ハハ まあ………そんなに儂いものを届けていらっしゃるの？

わたし はい。あ、と思ったら消えてしまう。せつかく届けたのに、ふっと消えてしまつて、

ハハ その、それはどなたから？

わたし それも幾度言つても言つても、すぐに消えてしまうので、
ハハ ……変わったものを届けていらつしやるのねえ、それで？

わたし はい。

ハハ まだ受け取つておりませんが、

わたし 届けたんですが、

ハハ が？

わたし やはり消えて届いていないも同然で、

ハハ ええ……

わたし 途方にくれています。

ハハ まあ……

わたし はい。

ハハ はい……

ハハ、思わず笑つてしまう。

ハハ うふふ。そんな届け物困るわねえ。

わたし ええ、これで幾度目のチャレンジか。

ハハ まあそんなに？

わたし はい。ですが幾度消えようとも諦めません。一瞬の閃きみたいなものだからつかみきれずにすぐに消えるんです。だから今みたいによく驚かれま
す。

ハハ ええ、分かつたわ。

ハハは落ち着いて。

ハハ 混乱しているのね、あなた。

わたし ……え、

ハハ みんな混乱してここへ辿りつくの。あなた、いつ新しい星へ来たの？

わたし あの、

ハハ 誰からうちのことを聞いたの？ リーさん？ 下鴨さん？ マリラ？

わたし いえ、

ハハ とりあえず落ち着いて。何かお飲みになる？

わたし いえ。

ハハ わたしたちも同じだったから分かるわ。混乱したままここへ移動して、最初はわけが分からなかったもの。大丈夫よ。何か力になれるから。あなた 何に困ってるの？

わたし 困ってるん（じゃなくて）

ハハ 食べ物？ 洋服？ 寢床？ 公共のサービスから溢れてしまう人は多くて

ね、そういう人たちの手助けになることならなんでも、

わたし 違います、わたし、

ハハ ひとり？ 家族はいるの？

わたし メッセンジャーです。届けるんです。

ハハ 大丈夫よ、落ち着いて。

ハハ、「わたし」の肩に優しく手をおいた。

ハハ 震えているわ……怖い思いをしたのね、分かるわ。

わたし いいえ。生きているものは皆震えるんです、モクの言葉。

ハハ え……？

わたし モクから、あなたへ。

「わたし」、息子を見た。

わたし ここにいる幼いモクじゃなくて、あなたほどに大人になったモクが届けるんです。

ハハ、思わず椅子から息子を抱き上げ、

「わたし」を警戒して少し距離をとった。

ハハ ……あなた……なんなの……？

Theater 9

モク、手をとめて。

在りし日のハハを見つめた。

ハハはまるで人形のように時間が止まって。

モク うん、難しいね……

モク こんなもの、信じきれないよね……

「わたし」だけがモクを振り返る。

モク あの時、これが言えたら……

モク あの時、これを伝えられていれば……

モクも「わたし」を見た。

モク 届くまで。

「わたし」は、うなづく。

Theater 7

「わたし」遙か向こうを指差した。

わたし ここから、太陽の光に反射して鉛色に鈍く光った地球が見えます。

ハハも、同じ地球を見ようとしたが、

ハハ ……地球はまだ真っ暗よ。いくら太陽に反射しても宇宙の闇に隠れていくわ。

わたし ずいぶん時間が経つと、うつすらと鈍色に見えるんです。

ハハ あなた……いつの話をしているの？

わたし あの日、わたしはそこにはいませんでした。

ハハは、息子をぎゅっと抱きしめたまま、

わたし まだ存在しませんでした。まだ生まれる前でした。資料と歴史であれば知り得るけれど、本当のあの日あの時の現在は分からない。そのことがいつもこの胸チクリと刺してきます。

「わたし」をじっと見る。

ハハ ……あなたは、ずいぶん先の世界からわたしを見ていると言いたいの？
わたし はい。幾度でも届けます。だから聞いて。今度は忘れないで。

ハハ あなた。

わたし はい。

ハハ 嘘をついているようには思えない。

わたし 嘘はつきません。

ハハ だけど意味不明すぎるの。

わたし だと思いません。

ハハ あなた、

わたし はい。

ハハ ……きつと何か事情があるのね？

「わたし」うなづいた。

ハハ いいわよ、聞くわ。それがあなたの助けになるのなら。

わたし これがあなたとモクの助けになりますように。

ハハ 「それはどういうこと？」なんて聞かないことにする、いいわ、話して

わたしほどに大人になったこの子が？ 私に？ なにを届けるの？

ハハは、息子を抱きしめたまま、

小さな椅子に座った。

わたし 葬儀の朝に、

そして正しく言い直す。

わたし あなたの葬儀の朝に、モクが、やっとあなたの話を語りはじめました。

ガリガリと、

文字を書いていたモクが椅子から立ち上がり、

ゆっくりとこちらへ歩いてくる。

そして、

Theater ∞

棺桶に眠るハハを見た。

モク ……母さんの顔……何か言いたげに歪んでる……

「わたし」も、同じように並んで棺桶のぞく。

わたし ちゃんとお別れした？

モク ……ちゃんと……

わたし うん、ちゃんと……

モク なにをどうすればちゃんとなる……？

モクが、「わたし」を見た。

モク もうずいぶん、長いあいだ……

わたし うん、

モク なんにも話せてない……

わたし 毎日、話しかけてたじゃない。

モク 君のことだって知らない。

わたし だけどお母さんの前で死が二人を別つまで、って誓ったでしょ。

モク 本当のことを、ちゃんと伝えられてないのに……

わたし ……本当のこと？

モク どうしてあの時、言ってあげられなかったのかなあ……

わたし ……あの時って？

モク でも子どもだったから、

わたし 子どものころの話？

モク なんて言えばいいのか、うまく、考えられなくて……

わたし そんな昔のことをどうして今になって、

モク ずっとずっと母さんを助けてあげられなかった……

わたし モク、

モク ずっとずっと苦しんで、

わたし ねえ、大丈夫？

モク だから母さんの顔……何か言いたげに歪んでるんだ……！

わたし モク！

モク、悲しみに顔を覆って棺桶から目をそらす。

わたし ねえ、なにを後悔してるの？

モク どうせ、

棺桶の中のハハを見る。

モク どうせもう過ぎたことで、戻らないことで、昔のことで、もう、どうしようもないことだから、もう、もういいんだ、だってどうにもできない、けど、もう……

モクはぐずぐずと言葉をこぼす。

「わたし」はモクをじっと見つめて、

わたし あのさあ、

指先で、紙の束とペンに触れる。

わたし なんてわたしが見たこともない故郷の物語を書いているか、分かる？

モク ……なんの話？

わたし わたしの仕事の話。

モク ……君の小説が、なに？ 今、関係ある？

わたし 知らないのに、書いていたら懐かしくて涙が出るのよ。

モク ……え？

わたし モクは覚えているんでしょう？ 都会っ子だったって言った。

モク それが？

わたし 知りたくて書き始めたの。調べて書いて、そしたら、知らないのになんだか知ってるの。もともと知っていたみたいに、もうあの故郷はわたしの中に在るの。

モク ごめん、今、何の話？

「わたし」、紙の束と、ペンを差し出した。

わたし 書いて。

モク え……？

わたし 書くの。

モク 書く、

わたし そう、

モク ……なにを？

わたし 物語。

モク は………？ 僕は……作家じゃな、

わたし 本当は誰も彼も作家だから、誰だってメッセンジャーになれるのよ。

モク、「わたし」を見た。

大きくため息ついて。

モク 君が、なにを言いたいのか、ごめん、今はちょっと、頭が回らなくて、分らないよ。埋葬が終わるまで、少しひとりにして欲し、わたし あなたの話よ。

「わたし」の声が、思ったよりも強く。

モクは少し驚いた。

わたし あなたのこと。あなたが生きてきた道よ。わたしがいくら作家でも、その道を書くことなんて出来ないの。だけどあなたは振り返られる。思い出せるし思い直せる。だからあなたしか書けないの。ちゃんと聞いてよく聞いて、本気で言ってるの。あなたのことよ。

モク ……何を言っつて、

わたし 今よ、今のあなたのこと。お母さんの顔を見て後悔しているのはあなたで、過ぎて戻らないあの時に泣いているのはあなたで、だったらあなたが自分で伝えるしかないじゃない。

モク ……伝える……って、

わたし 誰に何を伝えたいの？

「わたし」、もう一度、紙の束とペンをモクに差し出す。

わたし あの時、なにを言っつてあげられたら良かったの？

わたし そしたらお母さんのなにかは変わった？

わたし 今のあなたは何か変わる？

わたし 子どもだったからうまく考えられなかった？

わたし だったら今のあなたが考えて。

わたし 言葉は時間と空間を超えて行くの。

ぐいっと差し出されたペンを、

モク、手に取る。

と、

始まる。

Theater 9

息子をぎゅっと抱きしめたハハは、
あの時たくさんの道のりを走ったのだ。

ハハ 大丈夫よ、モク。パパは後から必ず、必ず来るから。今は振り返っちゃダメ、前を向いて、モク、絶対大丈夫だから、走るから、ママ、絶対にお前を助けるから……！

「3番ゲートは閉めました」

「4番、5番ゲートに向かってください」

ハハ 今さら！？ 反対方向よ！

「ここはもう閉まりました」

ハハ 子どもだけでも、

「ここはもう閉まりました」

ハハ お願い、通して！ 小さい子どもがいるから、

「こっただって赤ん坊背負ってんのよ」

「あんただけじゃないんだから」

「こっちだって年寄りがいるんだ」
「誰か、」

「どうなってんだ！」

「誰か、」

「説明してくれ！」

「誰が責任とつてくれんの！」

「どいて！」

「どけ！」

「どいて！」

「どけ！」

その時、

「助けて……！」

ハハ、その言葉に足を止める。

「お願い助けて！」

ハハ あ……

ハハ、とっさに手を差し伸べた。

「助けて……」

だが、

少し考えて、手を引っ込めて、

「助けて……」

走る。

「助けてお願い！」

走る。

「助けて！」

ハハ 振り返っちゃダメ振り返っちゃダメ振り返っちゃ……

「もう間もなく」

ハハ っ……！

「5番ゲート閉まります」

ハハ 待って！

ハハ、誰かが差し伸べてくれた手を取って、
船に乗り込んだ。

荒い息のまま、
振り返る、
と。

ハハ 真っ暗闇に……飲まれていく……

恐ろしくて震えた。

もう一度、しっかりと息子を抱きしめる。

ハハ 生きてる、

そしてそれを言う自分自身のこと、

ハハ 生きてる……

そしたら一気に力が、抜けた。

安堵すると泣いてしまうが、

ぐっと堪えようとして堪えきれず、

涙とともにむせて、大きく咳が続く。

ハハ 大丈夫、大丈夫よ……

息子がハハの咳を心配しているのだろう。

女 子どもがいるの？

暗い声にぎよつとするハハ。

見ると、知らない女。

ハハ え、ええ……

女 この水、良かったら。

ハハ ……え？ ……あの、いいんですか？

女 その子に。

ハハ でも、

女 いいの。

女はもう一度言った。

女 もう……いいの。

その言葉の意味を、深くは聞かない。

女はそれきり黙ったまま。

ハハ ありがとう……

ハハは、自分の右手を見た。
ひっこめた右手。

じつと、じつと、見つめた。

ハハは息子に語り、

モクは、その時のハハを思い出しながらつぶやく。

ハハ・モク 決めたわ……いい？ モク、よく聞いて。私たちはこれから出会うどんな人にも必ず何かできるはずなのよ。何か手伝えるはず。たとえそれが自分を削っていくことだったとしても。

ハハ・モク 生きていることに感謝するの。

ハハ・モク たったひとしずくの水も、

ハハ・モク たった一輪の花も、

ハハ・モク たった一枚の葉っぱも、

ハハ・モク たったひとかけらの肉も、

ハハ・モク 決して決して、なにひとつ、粗末にはいけない。

ハハ・モク そしてたとえ目の前のその人が、

ハハ・モク 自分を助けてくれなくても、決して、恨んじやいけない。

ハハ・モク どんな人でも、どんな理由があっても。

ハハ・モク いい、モク。ママとの約束よ。

小さい椅子に、モクが座っている。

きつと毎日こう聞いていたのだろう。

モク ママ、パパはいつ帰ってくるの？

ハハ もうすぐよ。

モク もうすぐって？ 明日？ 明後日？ 3日後？ いつ？

ハハ もうすぐはもうすぐよ、ほらもうこんな時間。ベッドに入って。

モク 嘘だ。

モク 嘘の笑顔だ。

モク 寝苦しい夜、真夜中、キッチンで体をかきむしる母さんを見たよ。

ハハ、

かきむしる。

血が出るほどに。

内臓が、

口から出そうなくらいの、

苦しみの嗚咽を吐き出して。

泣いている。

「わたし」背中をさする。

ハハ、きつと息子だと思つて。

ハハ 平気よ、モク、大丈夫、ママ、何でもないか……

振り返る。

「わたし」を見て、

ハハ ……！！

驚く。

Theater 10

ハハ ……びっくりした……！

ハハ、息を整えて。

ハハ あの………驚いて、その……いつからそこに？

わたし 平気じゃないならちゃんと行って。

ハハ あの……どちらさま？

わたし あなたが言わないから黙ったのよ。

ハハ え？

わたし あなたの代わりに、あなたのいちばんさいしよを聞こうとしたの。

ハハは、じっと「わたし」を見つめる。

ハハ ……あなた、混乱しているのね。私に手伝えることがあるなら、
わたし 混乱しているのはあなた。

ハハ は……

思わず、ハハ、笑ってしまう。

ハハ 私が……混乱しているなら、それは、夜中に突然見知らぬあなたが、いいの、うちに来たことはいいのよ、ここはそういうところだから、驚いただけ、誰からうちのことを聞いたの？ リーさん？ 下鴨さん？ マリヲ？
わたし モク。

ハハ ……あなた……もしかしてどこかで会った？
わたし ええ、幾度も。

ハハ うちに来た人たちはみんなファミリーになるから絶対に覚えているんだけど、ごめんなさい、すぐに、思い出せなくて……
わたし いえ、いいんです。いつだってすぐに消えて忘れられやすい、だから幾度でも諦めません。

ハハ、両手で顔をおおって、

ハハ ごめんなさいね、わたしも、その、落ち着くわね……

小さく深呼吸をして、しばらく。

ハハ なにかお飲みになる？

「わたし」少し考えて、

わたし ホットミルクに黒砂糖。

ハハ ……息子もそれ好きだわ。昨日、ニコスから分けてもらったところなの。
わたし 毎晩、ああなるんですか？

聞こえたが、

ハハ え、なあに？

と、聞こえない振りをした。

わたし 黙るには2種類あると教えてもらいました。ひとつは溢れ出るものを

塞ぐために黙る、もうひとつは、何かを聞こうとして黙る。

コトリと、テーブルに置かれたコップ。

ハハ なあに？ なんの話？

湯気。

甘い匂い。

わたし ……いただきます。

一口、飲んだ。

わたし ……おいしい。

ハハ そう、良かった。

わたし ……落ち着きました。

ハハ そう……！ やつぱり、混乱していたのね。もう大丈夫よ。これからのことを一緒に考えましょう。手伝える出来る限りのことをするわ。名前を聞いても？

わたし ……

「わたし」が黙って俯いたから、

ハハは思わず「わたし」の手を優しく取った。

ハハ いいのよ。無理しないで。名前を言った途端に泣き出す人もいたわ。だから言いたくなかったその時でいいの。

「わたし」顔をあげた。

わたし 故郷から新しい場所へ異動して戸惑っている人たちを支援しているんだと、聞きました。

ハハ ……ええ、そうね。ファーストインパクトの時に移動してこっちに来た

の。だから、セカンドインパクトや、サード以降の人たちの役に立つならと思つて、

わたし かなりの混乱期だったと、聞きました。

ハハ あの時はね、移動の船の中でもどこへ向かうのかも曖昧であやふやで、わたし 移動中に離れ離れになる家族もいたとか。

ハハ たくさんね。ついこの間のことなのに、いろんなことが起こりすぎるとなんだか遙か昔みたいに見える。故郷では穏やかで、毎日天気と夕ご飯のことと流行りの病気と息子のことばかりで、こんなことになるなんて、なんにもちつとも知らなくて、

わたし 大きな世界のことを全て知らなくても、毎日幸せです。

ハハ 本当にそうね。本当に、そうだったわ……

わたし あの……

ハハ なに？

わたし 旦那さんはどちらには？

ハハ、愛想笑をしながら、

カリカリと手の甲を搔いた。

ハハ ……っ、

わたし どちらに？

ハハ なあに、あなた、突然、

カリカリ。

わたし いけないことを聞いたでしようか？

カリカリ。

ハハ いいえ、そんなことは、なぜ？

カリカリ。

わたし 一緒に船に乗らなかったんですか？

カリカリ。

ハハ それは、あの時、混乱してたから……

ガリガリ。

わたし お互いに探さなかったんですか？

ガリガリ。

わたし 探したはずですよ。

ガリガリ。

わたし なのに、どうしてモクには「もうすぐ帰ってくる」と言うんですか？

ガリガリ。

「わたし」は、

ガリガリと掻くハハの手を握った。

が、ハハ、払いのけて。

ハハ なんでもないの、気にしないで。

ガリガリと掻きながら、微笑む。

わたし あなたは何を我慢してるの何を堪えているの？

ガリガリ。

ハハ 我慢なんて、みんな何かしらを我慢しているものよ。

ガリガリと、また微笑んだ。

わたし こんな時でも笑うの？

美しく歪む。

わたし あなたの笑顔は美しい、けど、

首、ガリガリ。

わたし そんなの嘘。

腕、ガリガリ。

わたし モクは見抜く。

顔、ガリガリ。

わたし 子どもは見抜くって、分かってるでしょう？

ガリガリ。

ハハ なんでもないのなないんでもないのよ……！！

なんでもなくはないほどに、

ガリガリ。

ガリガリ。

ガリガリ。

「わたし」

ハハの手を、強く握った。
掻き筆れないように。

ハハ っ……！

離さない。

ハハ 離して。

離さない。

ハハ 離して！

離さない。

ハハ 離して……！

「わたし」は決して離さない。
ハハは身を振って苦しむ声をあげる。

ハハ 離して！

わたし 離さない！

わたし 溢れ出るなら言葉にして！

わたし モクじゃない、

わたし あなたのほうが黙ってる！

ガリガリ。

これは、

モクのほうの音。

モク あのね。

モク 母さん。

モク 僕のいちばんさいしょはね、

モク 遠く離れて振り返ってさっきまで僕らがそこにいた青と緑の星。もう真っ暗闇。僕は何を見ているんだろう。何を聞いているんだろう。叫んで泣いて嘆いて怒って、母さんが泣いているから僕も泣かなきゃいけないのかな。たくさんの誰かが泣いているから、たくさんの誰かが怒っているから、たくさんの誰かが叫んで嘆いているから、僕も同じようにしなきゃ、みんなと同じように、だけど、あ、今、さっき、何かが浮かんで、何かを感じて、何かを思ったのに、すぐに消えてしまうから、つかみ損ねるから、でも確かに僕は、僕は、なにかを……なにかを……思っていたんだろう……

ガリガリと、

モクは文字を書き付ける。

それを、ハハは、聞くだろう。

モク だから、じつとじつと……

モクの言葉を、

「わたし」が伝える。

ハハが聞く。

わたし 唇閉じた。

わたし そしたらね、聞こえる。黙ると聞こえる。色んなことが。

わたし どこかで、風、吹いた。

わたし 3ブロック先を歩く誰か。

わたし 聞こえる。

わたし 遠くで子どもが笑う。

わたし 雨の音。

わたし 緑が揺れる音。

わたし 花がぼんと開く音。

わたし レプリカの月の音はしんと黙ってなにも聞こえない。

わたし 星の音。

わたし 3つに分かれた太陽の音。

わたし 暗闇の地球の音。

わたし 聞こえる。

わたし 僕の呼吸、心臓、細胞がズチズチいう。指先震えて、ああ、そうか。

わたし 何かが震えるから、音になる。

わたし 聞こえるはずのない小さい小さいぶるぶる、見えるみたいに聞こえる。

わたし 見える聞こえる見える聞こえる花も緑も虫も僕も星も太陽も暗闇も、
全部が同じに見える聞こえる聞こえるどこまでも地平線に並んで一緒に在る。

わたし あ……そうか……

わたし 生きているものはみんな震えて音がする。

わたし そしたら、

わたし いちばんさいしょの僕の音までも、見える聞こえる。

ハハ いちばん、さいしょ……？

わたし 振り返った地球。青くて青くて。僕は、

わたし 僕はなんてきれいなんだって……

わたし 真っ暗闇に飲まれていくその色さえも。

わたし 僕、あの時、そんなこと、思ってた。

わたし ……それをね、母さんに伝えたくて真夜中の階段を降りて、

わたし 降りて、

わたし 降りたら、

わたし 真夜中キッチンで、泣きながら体を掻き毟る母さんを見た。

わたし 黙って見た。

わたし そしたら、

わたし 母さんの震えまでも、見える聞こえる。

これはハハが実際に言ったことか、
息子が聞いたと感じたことか、
どちらでもかまわない。
きっとどっちも一緒だから。
「わたし」はしっかりとハハの手を握りしめている。

ハハ 連絡とれなくて……あの人……！

ハハ でも時間がなくて船に乗らなきゃいけないくてどうしようもなくてモク抱
きかかえて飛び乗って泣きながら私、

ハハ 真っ暗闇に飲まれちゃったのかと思ってたのに、

ハハ だけど諦められなくて探して探してやっとこっちで見つけたのに、

ハハ あの大変な時にあの人、

ハハ 別の女選んで移動してた……！

ハハは、泣いているのか、
怒っているのか、
悲しんでいるのか、
なにもかもが、
交じり合っている。

ハハ こんな大変な時だからもう僕は自分に嘘をつきたくないんだって泣きながら私に謝った。なんでもするから自由にしてくれって、私縛り付けたことなんて一度もない一度もない一度もない「飲まれれば良かったのに」

ハハ、自分で言って、

ハハ 今、誰が言った？

はっとする。

ハハ 私じゃないそんなこと思わない、だけど許せないこんな時だから支え合
うんじゃないの、私とモクは何だったの、ずっと毎日暮らして積み重ねて、
それを嘘だって言うの？ 私には現実だったわよ「飲まれれば良かったの
に」

ハハ、自分で言つて、
またはっとする。

ハハ 今の私……？

ハハ 「飲まれれば良かった

ハハ 違う！

ハハ 振り返っちゃだめ、前を、未来を、見なきゃ、

顔を上げて、
ハツラツと。

ハハ 下鴨さん、私に出来ることありませんか、リーさん、私も手伝うわ、マ
リラ、それなら私の家を提供できるようにする。

しかしすぐさま項垂れる。

ハハ 私とモクは何だったの……？

そしてまた顔を上げるが、
ハツラツなのか、鬱屈なのか、
入り乱れて。

ハハ 振り返っちゃだめ「飲まれれば良かったのに」前を、未来を、見なきゃ
「飲まれれば良かったのに」考える隙を作っちゃ「飲まれれば良かったの
に」ダメ、ああ、体が……焼けそう……！

体中を這うのは自分の嫉妬だ。

それを掻き筆りたいのに、

「わたし」が離してくれない。

ハハ こんなことで、

ハハ 嘆いているばあいじゃないのよこんなことで、

ハハ ここに来れなかったたくさんの人のことを知ってるの……！

ハハ 新しいここで生きて行かなきゃいけない苦しきも知ってるのに……！
こんな、こんなくだらないこと、

どうにかして掻きむしろうとする。

「わたし」はハハの手をつかむ力を込めた。

わたし くだらないことじゃない。

ハハ 世界中が大変なのにたかが夫のことで、

わたし だけどあなたが生きてきた大事な人生よ。

ハハ だから笑わないといけないの。

わたし 誰が決めたの？

ハハ 元気に生きていかなきゃいけないの。

わたし 誰が決めたの？

ハハ 自分でできる限りのことをやらなきゃいけないの……！

わたし 誰が決めたの？

「わたし」、ハハから目をそらさない。

ハハ ……自分で、決めた。

わたし どうして、

ハハ 血の味……

わたし 血……？

ハハ ……憎しみみてね……血の味がするのよ。

ハハは身を振る。

口の中に広がって、

ハハ ……これが、私……

味わって、

ハハ こんなのが、私……？

味わって、

ハハ これが……私……！

苦しくなる。

身をよじりたくなる。

味わわないために、

掻き毟りたくなる。

わたし 違う……！

ハハ、「わたし」の声に顔をあげる。

わたし モクが知ってるあなたは憎しみの人じゃない。

ハハ ……あなた……なんなの？

わたし メッセンジャー。

「わたし」大きく息を吸った。

モク・わたし あのね、ママ。

その声に、ハハ、我にかえる。
振り返る。

息子がいる。

興奮した体を、

深呼吸でどうにか立て直し、

息子に嘘の笑顔を作る。

ハハ モク……どうしたの？ 眠れないの？ ホットミルク作ってあげようか？

モク・わたし あのね、言えなかったことを今、つたえるね。

ハハ 今……？

モク・わたし 見ちゃいけないと思って。

モク・わたし 泣いているママ。

モク・わたし だからそっとベッドにもどった、けど、

モク・わたし やり直すよ。

モク・わたし あのね、

モク・わたし 僕のいちばんさいしょはね。きれいだって思ってしまったんだ
ほんとのほんとの、いちばんさいしょ。

ハハ ……なに？

モク・わたし だけどそう思った次のしゅんかんにね、びっくりするくらい、涙があふれた。パパがそばにいなかったから。怖くなって、泣いた。

体を掻き筆りたくなるのを抑えて、

ハハ、両手を広げた。

ハハ おいで。

そして息子を抱きしめる。

モク・わたし それからもうきれいだなんて、ちっとも思えなかった。

ハハ 大丈夫よ、パパ、もうすぐ帰ってくるから。

モク・わたし ううん、そうじゃない。

ハハ なに？

モク・わたし 僕じつとしつと黙ったから、いちばんさいしょが見える聞こえる。
る。

ハハ なあに、どういうこと、

モク・わたし そしたらね、僕のだけじゃなくて、いろんないちばんさいしょを、からだでうんと見える聞こえる。あのね、

ハハ うん？

モク・わたし ママのいちばんさいしょも見える聞こえる。

ハハ ええ？

モク・わたし　パパがゆるせない？

ドキリとして、

ハハ　…モク、なにを、

モク・わたし　ちがうよ、ママ。もつともつと、いちばんさいしよ。

モク・わたし　にくしみになるまえだよ。

モク・わたし　いかりにふるえるまえ。

モク・わたし　いちばんさいしよのふるえ。

モク・わたし　ほんとのふるえ。

ハハ　一番、最初は…

モク・わたし　「ああ、良かった」

モク・わたし　「あの人、」

モク・わたし　「生きていた、良かった」

モク・わたし　これが、ママのいちばんさいしよ。

モク　本当に聞こえたんだよ、母さん。

「わたし」そつと、ハハのそばから一歩離れる。

息子を抱っこしたハハ。

そこにひとり。

パチンと、

夢から冷めたように。

ハハ あ……

見渡す。

「わたし」を見つけることはない。

ただ、「わたし」が飲み干した、

ハハ コップ……

それは残された。

今度の一瞬の閃きは、

消えたのか、

ハハに届いたのかは、

分からない。

Theater 1 1

たくさんの紙の束。

「わたし」は読み終えた。

モクはじつとしつと黙ってそこにいる。

わたし ちゃんとお別れ、できそう？

「わたし」はモクを振り返る。

モク ……気休めだよ。

わたし あ。わたしの仕事をそう言っちゃうんだ。

モク 君は、君のは、仕事だけど、僕のこれはただの、

と、紙の束。

モク 気休めだよ。

わたし なにが気休め？ あなたの思い出にわたしを派遣したこと？

モク 自分に都合のいいことを書いた。

わたし あなたがロマンチックなのは知ってる。わたしとお母さんを出会わせ
たかったんでしょ？

モク これで何かが変わるわけじゃないのに、

わたし あなたの気持ちは変わるかもしれないし。

モク だからそれが気休め、

わたし いいの、それで。

「わたし」の言葉は思ったよりも強い。

モクは少し驚いて「わたし」を見る。

わたし だってこれは誰かに見せるためのものじゃない。

紙の束を、モクに突きつける。

わたし あなたの物語よ。あなただけの。自分のために書いて、自分のために
語るの。仕事が作家じゃなくても関係ない。人間は震えてるってあなたが
言ったのよ？ 生きてるってあなたが言った。一番最初の震え、最初の音、
だけどそれをすぐに忘れちゃう。毎朝起きて仕事とご飯とあれもこれもが
震えを忘れさせる。だから自分が一番語りたい自分の物語を自分に聞かせる
の。

モクは「わたし」を見る。

モク ……君は……やっぱり作家だなあ。

わたし なにそれ嫌味？

モク 違うよ、褒めてるんだ、詩的だなあって、
わたしはあなたほど詩的な人に会ったことがないけど。

モク 僕……？

わたし じっとしっと黙っているとね、色んないちばんさいしよが、聞こえてくるんだ……

モク それ、

わたし 生きてるといろんなことが起こる。だいたいが思い通りにいかない。

モク ちよつと待って、

わたし そのたびに僕は耳を澄ます。そして知るんだ。ああ、そうか、と、さいしよにたどりつく。

モク 最後までは言わないよね？

わたし 僕はね、君とずっと一緒に震えていたと思ったんだよ。

モク ……どうして今そんな恥ずかしいことを言うの……

わたし 忘れられない震えだったから。

きっとプロポーズの言葉なんだろう。

わたし だからあなたと一緒にいようと思ったの。

「わたし」、モクと手をつないだ。

わたし 最後にお顔を見てからさよならしましょう。

モクは棺桶を覗く、

モク 母さん……

と。

モク 何か……言いたげに歪んでる……ように見えたのに、

そんなこと。

モク 今は、母さんが、笑っているように見える……

あるはずがない。

モク 僕は、自分勝手だ……

が、

ハハはもしかしたら、

微笑んでこの世から去っていくのかもしれない。

Theater 12

母、なのか、くみこなのか？

くみこ だって言葉は時間と空間を超えて行くから。

くるりと。

指双眼鏡。

くみこ 何か見える聞こえる？

のぞきこむ。

くみこ 何が見える聞こえる？

「わたし」なのか、ゆみなのか？

ゆみ 空。

くるりと。

指双眼鏡。

のぞきこむ。

くみこ 青い？

モクなのか、たろうなのか？

たろう 青い。

くるりと。

指双眼鏡。

のぞきこむ。

くみこ 雲は？

ゆみ 白い。

くみこ 海は、

たろう 呼吸してる。

くみこ 緑は、

ゆみ 生きてる。

くみこ 湖は、

たろう 静か。

くみこ 雨は、

ゆみ ひとつぶ、落ちた。

くみこ 鳥は飛んでる？

たろう 魚は跳ねてる。

くみこ 四つ足の獣は元気？

ゆみ 花はおしゃべりしてる。

くみこ ちようちよは軽く飛んでる？

たろう トカゲはゆっくりまばたきました。

ゆみ 虫はもぞもぞして、

たろう 星は瞬いて太陽はギラギラして、

ゆみ 月は微笑んで。

たろう 空は青い。

ゆみ 青くて青くて、

たろう 泣けるくらい青くて、

ゆみ なにもかもが震えて、

たろう その青い空から見下ろしたら、

くみこ そこにひとは？

ふと、

指双眼鏡を外していく。

くみこも、

ゆみも、

たろうも。

ゆみ まち

たろう まち

ゆみ みち

たろう みち

ゆみ いえ

たろう いえ

くみこ まち。

くみこ みち。
くみこ いえ。

くみこ 窓に明かり。
ゆみ 誰かの明かり。
たろう 誰かのおはなし。

たろう ぽつり。

ゆみ あ、

たろう またぽつり、

ゆみ あ、

たろう またまたぽつり、物語ともる。
ゆみ どのくらい？
たろう たくさん物語ともる。
ゆみ どのくらい？
たろう 震えているぶんだけ物語ともる。

ゆみ わたし、

くみこ たちがいない、はるか100年後。

ゆみ わたし

くみこ たちがそこにいなくてもそこに、

ゆみ わたし

くみこ たち以外の、ひとという存在がそこに在るなら、

ゆみ わたし

くみこ たちは、うれしい。

たろう うん、いちばんさいしょ。見える聞こえる。

おしまい